

ブログの表現スタイルについて

内山 和也

0. はじめに

社会学的・社会心理学の文脈では、以前から電子コミュニケーションが注目されているが、荻野（1996：10f.）も、電子メディアが言語行動を大きく変えると指摘し、「言語とコミュニケーションに関わる広い範囲を研究対象としてい」く必要性を説いている。かかる状況を踏まえて、例えば、田中（2001：98）は「近年登場してきた新しいメディアといえば、携帯電話とパソコンである。新しいメディアが登場すれば、そのメディアに則したルールや表現が出現してくる」とし、電子メールを考察の対照としている。本論では、最近急増しているブログと日本語のコンテンツとして定着度の高いウェブ日記とを表現の問題として考えてみたい。

1. ブログとweb日記の関係

ウェブには、「ウェブログweblog（blogと略される）」として知られるサイト形式が存在する¹。その発生を踏まえると、ウェブログは、批評や個人的な注釈・感想・評価をハイパーリンクとともに記した（部分を含む）コンテンツ（コメント付きチェックリスト）であり、ウェブ上に公開されたウェブ閲覧の日誌といえる。小野田ほか（1998）の基準を用いれば、ウェブログはテキストやデータベースからなるページよりリンク情報が多く、リンクリストや検索サイト（検索結果）より固有情報量が多いコンテンツであるといえる。

一方、日本語のサイトでは、「web日記」と呼ばれるコンテンツが発達しており（石井ほか2000）、ときにウェブログと同じものとされる。これは、日記のような体裁を持ち、それ自体「～日記」と題されるものが多いことを特徴とする。日本人は、自由で多様なアクセスにさらされる公的なものと理解（し情報をコントロールしようとする）するよりも、「ホームページ」を私的私有物と意識する傾向が強いということだろう（石井ほか2000、野村ほか2001など参照）。

web日記は横のつながりがあり、コミュニティを形成している。このような日記の変容を、川浦（2001：35）は「語られる自己から語り合う自己へ」の自己表現の変化であると捉えている（web日記コミュニティに関しては永江1999に詳しい）。Kawaura et.al（1998）・山下他（2000a）・山下（2000）は、日記というジャンルが、表現内容（事実か心情か）と指向性（自己指向か他者指向か）とによって、忘備録memoir・日誌journal・（狭義の）日記narrowly defined diary・公開日記open diaryの4タイプに分類できるとし、HP作者への質問紙調査などから、web日記についても同様の分類が可能であるとしている。

赤尾（2002）では、ウェブログの下位概念として「web日記」、「テキストサイト」、「ニュースサイト」を立てている。実際に、米国でブログとされるものには様々なものがある。しかし、テキストサイトは概ねweb日記より大きなリンク情報量を持っており、また、日本ではweb日記とニュースサイトとに積極的な関係はもたれていない²ことから、ウェブログと総称すべきかには疑問がある。

web日記が停滞・安定期にある（永江2000）一方、ブログは、有用なツールやサービスが提供されたことなどもあり³、急進している。そもそもweb日記は、日記ならば他者の批判にさらされないという気分を生ぜしめる点で、多くの日記者を集めたといえる。他方、米国では、ブログはジャーナリスティックな行為であるという理解があるように思われる。そこでは、情報の送付にリスクの伴うことが当然の前提にされている。日本には「個人ニュースサイト」というブログに近い形式があり、より固有情報量の多い形式は「テキストサイト」と呼ばれてきた（両者をテキストサイトと総称することもある）。個人ニュースサイト運営者の約2/3は、自分のサイトをブログであると認識している⁴という。またブログは、特定の事情から一部では否定的な語感を持っている⁵。

本論では、それぞれのサイト形式の関係を図1（後掲）のように理解したい。

¹ブログの歴史については、Blood（2000）[online]www.alterope.co.jp/splash/（トップ）に詳しい。

²[online]www.zdnet.co.jp/news/0305/07/cjad_horikoshi.html

³概要は[online]www.hotwired.co.jp/matrix/0305/005/index.htmlなど。

⁴[online]ascii24.com/news/inside/2002/11/11/639851-001.html

⁵概要は、[online]www.hotwired.co.jp/matrix/0305/004/index.htmlなど。

2. 話しことばの包摂

ブログとweb日記とは、日時の記載と定期更新という共通の性格づけを受ける。エヴァン・ウィリアムスは「日づけ順に頻繁に更新され、特定の記事やウェブサイトへのリンクを掲載している特定のフォーマット」「短い文章が時系列に掲載され、一番新しい情報が一番上に表示される」ことがブログの条件であると述べている⁶。もともとICT（情報通信技術）は、ローカルな標準時でなくリアルタイムを共有させるものであり（アタリ1986、ヴィリリオ1998など）、ウェブの表現がリアルタイムに制約されるのは自然である。また、実時間には、話しことばが書きことばより場面性が強く形式性が弱いことも関わりあう。話しことばでは、時間軸に沿った直線的な把握が必要になる傾向があり、時間軸に線的なものになってしまう。ICTは、時間を書き言葉の構造化の一般的手段とする。ただ、時間による構造化は、最新でないものの可視性を妨げるという弊害があるが、ブログ用のツールにはpermalinks機能が用意されており、話しことばの性質を巧く包摂している。

3. ジャンルの自己規定

ウェブへのアクセスはすべて記録され、監視されている。他人の干渉を受けない小さなコミュニティをなすには、私話的状况を創出しなければならない。そこで用いられるのが、ジャンルの自己規定と個人的なスタイルである。

ブログやweb日記には、自らをそう名乗るものが多い。米国でブログが既存の時報道と比較される一方で、大半のブログはごく限られた読者しか有していない。それらは、内輪で楽しもうといった趣きを持つもので（リービー2002）、公的な側面を持ちながら私的であるという点で、既存のジャーナリズムとは本質的に異なるものであろう。特に、日本語のサイトでは、内容が私的興味に基づくものであると意識されることが多いようである。これは、ブログの論争的な面（後述）を中和するもので、個人的スタイル（後述）も同じ点に関わっていると思われる。

ここで、ジャンルの自己規定は、書き手による受け手のふり分けだが、読み手による書き手のふり分けが「検索」である。ウェブはパッシブなメディアであり（三宅1996：100f.）、ウェブでのコミュニケーションは、書き手が受動的で読み手が能動的であることに特徴づけられる。ウェブ検索では、リンクの質と量とが結果表示に反映される⁷ことなどから、自分のページを探してもらいやすくするには、広く認知されたサイトと（相互）リンクすることが役に立つ。その結果、ウェブではコミュニティが重視されてゆく。また、表現の面では、特定の語句にポジティブフィードバックが働くように思われる。ギロー（1959：123f.）は、逸脱的に使用された語がテキストの文体を特徴づけるとして統計学の必要性を説くが、ウェブでは、語の使用および使用の環境、特にその一般的側面がテキストを特徴づけるといえよう⁸。木坂（1992：91f.）は、表現は明示的な伝達性の指向と個性的な表現性の指向との緊張関係の上に成り立つものであるとし、その相互性は文学表現で特に明らかだと述べているが、ウェブ上の電子テキストは、検索でヒットしやすい定型性と後述するスタイルの個性との緊張の上に成り立っているといえることになる。

4. レトリックとおしゃべり

ブログの特異性は、書き手の声 が読み手に直接届くというところにあるわけではない。言語表現は、受け手が人間であれば、送り手は人間でなくとも良い（エーコ1980）が、ブログは実体的な書き手（表現における一人称）の想定に強く結びついている。情報が情報であるには、読み取り可能であり、読み取りに際して評価を受けなければならない（アイゲン2001:16ff.）。チョムスキー（1994：141）が言うように、メディアの読解から有効な情報を引き出しうるのは、そこに些かの正義があるという信頼に基づく。

ブログでは、一人称の想定を強化するように書くことが重要なようである。「書物」の生産のプロセスは一人称の複数性を前提としているが、ブログでは、すべてを一人でやっていると示してみせることが一人称の想定の強化に役立つ。あるいは、テレビのように、こざれいに問題を解決しようと当たり障りのない決まり文句を並べるのではなく、むしろ感情的に反応して見せることが、ひとりの人間の存在を強く意識させる。我々は個人の不公平や偏向を気分や感受性の問題として容認しがちなのである。結局、紙に書くように推敲とともに技巧を重ねることで人間を垣間見せるのではなく、人格のイメージを端的に植えつけることが求められ、練り上げられたことばより同時代的な気分を盛り上げる

⁶[online]www.hotwired.co.jp/matrix/0305/001/index.html

⁷www.google.com/technology/および馬場(2001-2003)など参照

⁸検索結果に含まれるサイトの種類（Glasner2003）によって、キーワードの意味属性に関する知識を得るという方向も考えられる。また、フィッシャー（2001：292）は、ICTが言語に与える変化で最も明らかなのは、それに関する新語や表現だと述べているが、語句へのポジティブフィードバックは、サイト名に対しても働くようである（[online]ascii24.com/news/inside/2002/10/18/639345-000.html）。

振る舞いの方が価値がある。

ことばを行動として捉え、何を話すかよりもどのように話すかを問題にするという点では、説得の技術としての古典時代のレトリックに似ているといえるかもしれない。その一方で、時事問題を取りあげるにせよ、それは単なる「おしゃべり」ではないかとも見える。われわれの話しことばの大半は無益なおしゃべりで、話すことと同じくらい簡単にウェブで行動できるのであれば、その大半もおしゃべりになるのが自然であろう。

そこで注目されるのが、電子テキスト全般に見いだすことのできる表記上の特徴である。それらは、手軽な表現法として話しことばの性質（談話体）をとりこむときに必要になるもので、話しことばが空間と時間とに制約され書きことばより不自由である以上、何かを補うというよりも余剰を付加するものと考えべきであろう。電子掲示板や電子メールでの特徴的な表記の使用は、ことばが内容を伝えるものであれば形式は自由に操作してかまわない（形式は本質的に無用である）という理解によるものと思われる（拙論2002）が、他方、テキストが言語使用の一般的な面に特徴づけられるときに、テキストの個性性を高めようと表記を操作することは現実的な選択といえる。これは、内容を伝えるべく一定の読み手を確保しておくには形式の工夫が重要だという理解といえ、ともに内容（コンテンツ）こそが重要だという共通の理解の中に分化するものである。

ただ、web日記が一般に特徴的な表記に訴えるのに対して、認知度の高いブログは表記の変形に抑制的である。これは、先に述べたようにブログが公的かつ私的であること、あるいは弁論かつおしゃべりであることを示すものといえる。

5. 個人的スタイル

人格がもともと流動的で多面的なものであるとすると、それを容易に形にできるオンライン環境で、オフラインと異なったあるいは複数のペルソナを持つことは自然であるように思われる。ウェブは「ボイス・チェンジャーならぬパーソナリティ・チェンジャー」（室井他1992：36）という側面を持っている。ウェブ上では9割以上がハンドルを使い、2割が現実とは別の人格があると意識しているともいう⁹。タークル（1996：10章）は、ウェブ上で複数の人格を使い分けるとき、自己は多重でありながら一貫しているという。多様性と一貫性の併存は、互いにコミュニケーションを行う複数の自己（の多様性）を意識することによってなされる。ウェブの基本的な構成は、それ自体が多重性と一貫性との併存のモデルであるため、複数の人格または人格の複数性の使い分けを促すと言える。

しばしば日本人の言語行動は場面に合わせてスタイルを使い分け、欧米人はスタイルの選択で場面をコントロールされると言われる。一方、受動的な書き手と能動的な読み手によるウェブで、スタイルの選択は人格の選択と受けとられることになる。場面に関与するのが専ら読み手であるとき、特定のスタイルは、そのスタイルに自然な書き手（の人格）を想定させる（拙論2002）からである。人格の想定と関連した表現項目に文末の形式と関係した「役割語」（金水2003）があげられる。これは、特定の人物像と結びつけられた話体で、主に会話文に現われる表現のステレオタイプとして標準語（基準となる書きことば）との偏差によって階層化された体系（＝ヴァーチャル日本語）をなすという。コッホ（1987：160）がいうように、書きことばは、話しことばを下位のステレオタイプとして取り込む。話しことばは、書きことばであることを侵犯しない限りで（つまり書きことばを標準として）ステレオタイプとして機能し、また新たなステレオタイプをつくりだしてゆく。また、ヴァーチャルリアリティは、現実の中の安価な現実であるといえる。位相語がリアルで役割語がヴァーチャルだとされることから、それが安価な現実であることが知られ、一方で、役割語が書きことばのスタイルとしてヴァーチャルであることは、話体が事実上の話しことばであり、話しことばがその一部として安価な書きことばであることを物語るものと考えべきだろう。音声は安価なメディアである反面、担いうる情報量や伝達の範囲、場面への依存や時間軸に沿った直線性など、使用に制約が多い。

6. リンクの質と量

個人ページにリンクを盛り込むことは、自己の多様な関心を一貫したものとして構成するという行為であり、ブログはそのことを端的にあらわしている。また、リンクは引用の行為であり、リンクへの言及は批評性を帯びることになる。web日記が非論争的であるのに対して、ブログは本質的に論争的である。web日記では、50%のweb日記作者が（無断で）内容の訂正や削除を行なったことがあるという（川上他1998）。それに対して、ウェブログで内容の訂正や削除はより慎重でなければならない（Boutin2002）、追加による訂正・追加による削除を行なうなどしなければならないということもあろう。web日記の表現内容を特徴づけるのは、その凡庸さ（赤尾2002）がリアリティと結びつくことである。コミュニティ内の他のweb日記への言及が、平凡な日常性から時事問題などへの感想に及ぶようになると、web日記からブログへの接近も生じる。ブログとweb日記との違いは、リンク情報量だけでなく、リンクの性質にもよるといえるだろう。

⁹読売新聞オンラインニュース2002年3月18日付

浜田(1991:42 n7)は、テキスト間に潜在的に成立している関係の意味を体現するものが接続語であり、接続語に関係を規定する積極的な機能があるわけでないとしている。ハイパertextについていえば、開始タグ内のリンクターゲット(HREF属性)は関係を作るが、アンカー要素内のテキスト文字列は関係を様々な仕方で確認するといえるであろう。ここから、ジャンルの特質を考える前提として、リンクの形式を分類してみることにとも一定の意味があるように思われる。

- 分類：関係の指示：指示語(ここ これ こんな)
関係の表示：注釈(詳細 記事 ソース ネタ元 日本語版 PDF)
場所の指示：サイトの運営主体名(個人名・ハンドル・団体名・企業名)/サイト名
場所の表示：URL
内容の指示：ページのタイトル(ヘッダ)・記事の見出し/サービスの内容・ソフト名/本文の要約/商品名などの名前や商品などの説明/イメージのタイトルや内容
内容の表示：本文の直接引用
行為の指示：依頼や要請(ここ押して こっちもみてね これ買ったら)
行為の表示：行為の結果(こんなのつくってみた よそに投げてやった)

7. おわりに

本発表では、ブログをリンク情報量と固有情報量との関係から規定したが、ブログは種々の二項的性質の併存によって特徴づけられるように思われる。それは、その表現においても同様である。表現一般における二項的性質の併存は、従来指摘されてきたものであるが、ブログはそのような表現を典型的に、かつ多くの情報源から大量に生み出すことで、表現研究の重要な対象になりうると思われる。本発表は、その基礎づけとなるものであろう。

参考文献・資料

- アイゲン,マンフレッド 2001 「二〇世紀の生物学のうち何が生き残るだろうか」,マーフィー&オニール(編)『生命とは何か これからの50年=未来の生命科学への指針』[1996] 培風社.
赤尾晃一 1999 個人の情報発信メディアとしてのWeb日記
[online]tokyo.cool.ne.jp/webdiary/keynote.htm .
赤尾晃一 2002 「ハイパージャーナリズムとしてのウェブログ」
[online]www.akaokoichi.net/sougou/weblog.pdf .
アタリ,ジャック 1986 『時間の歴史』蔵持不三也訳 [1982,1983] 原書房.
石井健一・辻大介・橋元良明・森康俊・三上俊治 2000 「内容分析による個人ホームページの国際比較 自己開示・自己表出を中心に」,『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』14,pp.2-82.
ヴィリリオ,ポール 1998 『脳世界 最悪のシナリオへの対応』本間邦雄訳 [1996] 産業図書
内山和也 2002 「現代口語体の表現スタイルについて」,『広島大日本語教育研究』12,pp.83-90.
エーコ,ウンベルト 1980 『記号論』池上嘉彦訳 岩波書店.
荻野綱男 1996 「電子メールの光と影」,『日本語学』15(12),pp.4-11 明治書院.
小野田浩平・土肥浩・石塚満 1998 「WWWハイパーリンクの意味による分類とノードリンク構造の提示」,第56回情報処理学会全国大会,No.1Z-03.
オルポート,ゴードン・W. 1970 『心理学における個人的記録の利用法』大場安則訳 [1941] 培風館.
甲斐睦朗 1982 「日記の文体」,宮地裕ほか(編)『文体史』講座日本語学 8,pp.68-88 明治書院.
川浦康至 2001 「メディアと自己表現」,川上善郎(編)『情報行動の社会心理学:送受する人間のこころと行動』21世紀の社会心理学第8巻,3章 北大路書房.
川上善郎・川浦康至・山下清美 1998 「サイバー空間における日記行動報告書」
[online]homepage2.nifty.com/rumor/nikki/nikki.html .
木坂基 1992 「日本語表現法 日本語表現法研究の構想」,奥田邦男(編)『日本語教育学』教職科学講座第25巻,pp.88-102 福村出版.
岸本千秋 2000 「インターネットの日記サイトにおける表記の特徴」,『武庫川女子大学文化研究所年報』12, p.1-pp.15.
岸本千秋 2003 「インターネットと日記」,日本語学22(5), pp.38-48 明治書院.
ギロー,ピエール 1959 『文体論 ことばのスタイル』 [1954,1957] 佐藤信夫訳 白水社.
金水敏 2003 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店.
コッホ,ワルター 1987 「演劇の生得的基礎 ドラマおよび関連文化的事象の記号発生について」(山田=ボヒネック頼子訳),日本記号学会(編)『文化のインターフェイス 境界・界面・越境』記号学研究 7,pp.149-183 東海大学出版会.
小林多寿子 2000 「自己のメディアとしての日記 近代日記の成立」,『現代のエスプリ』391, pp.73-83 至文堂.
佐竹秀雄 2002 「変容する『書く暮らし』」,日本語学21(12), pp.6-15 明治書院.

- タークル,シェリー 1996 『接続された心 インターネット時代のアイデンティティ』 [1995] 日暮雅通訳 早川書房.
- 田中ゆかり 2001 「携帯電話と電子メールの表現」, 飛田良文ほか(編) 『表現』 現代日本語講座 2 pp98-127 明治書院.
- チョムスキー, ノアム 1994 『アメリカが本当に望んでいること』 [1992] 益岡賢訳 現代企画室.
- デュフレンヌ, ミケル 1968 『言語と哲学』 長谷川宏訳 [1963] せりか書房.
- トドロフ, ツヴェタン 1987 『象徴の理論』 [1977] 及川他訳 法政大学出版局.
- 永江孝規 1999 「インターネットにおける自発的コミュニティの形成、特にWeb日記に関して」, 『尚美学園短期大学紀要』 14, pp.59-80.
- 永江孝規 2000 「インターネットにおける自発的コミュニティの形成、特にWeb日記に関して」 HTML版 [online] www.shobi-u.ac.jp/~tnagae/pub/wdc/010409.html.
- ネルソン, テッド 1994 『リテラリーマシン ハイパーテキスト原論』 ハイテクノロジー: コミュニケーションズ社訳 [1980, 1992] アスキー.
- 野村早恵子・石田亨・正木幸子・横沢誠・篠原健 2001 「インターネットにおけるアイデンティティの国際比較」, 『電子情報通信学会論文誌D-』 84(2), pp.222-231.
- 馬場肇 2001-2003 「Googleの秘密 - PageRank 徹底解説」 [online] www.kusastro.kyoto-u.ac.jp/~baba/wais/pagerank.html.
- 浜田麻里 1991 「『デハ』の機能 推論と接続語」, 『阪大日本語研究』 3, pp.25-44. 大阪大学文学部日文学科(言語系).
- フィッシャー, スティーヴン 2001 『ことばの歴史』 鈴木訳 [1999] 研究社.
- 三上俊治 1999 「インターネットと流言」, 佐藤達哉(編) 『流言、うわさ、そして情報 うわさの研究集大成』 pp.327-337 至文堂.
- 三宅なほみ 1996 「インターネットのリアリティ」, 『現代思想』 24(4), pp.98-105 青土社.
- 室井尚・西垣通・吉岡洋・黒崎政男 1992 「ポストモダンの情報空間」 (日本記号学会第11回大会ワークショップA), 日本記号学会(編) 『ポストモダンの記号論』 (記号学研究12), pp.19-58 東海大学出版会.
- 山口英彦 2000 「電子コミュニティにおけるエモティコンの役割」 平成11年度神戸大学卒業論文.
- 山下清美・川浦康至・川上善郎 2000 「WEB日記の内容と文体の特徴」, CmCC研究会第3回シンポジウム発表資料. [online] kujira.psy.senshu-u.ac.jp/%7Eyamasita/works/CmCC3.pdf.
- 山下清美・藤原尚美 2000 「自伝的記憶としてのWEB日記 内容と文体の性差の検討」 [online] kujira.psy.senshu-u.ac.jp/%7Eyamasita/works/interaction2000.pdf.
- 山下清美 2000 「WEB日記は、日記であって日記でない」, 『現代のエスプリ』 391, pp.166-180 至文堂.
- 山下清美 2001 「サイバーコミュニティのツールとしての、Web日記と掲示板」, 『生活協同組合研究』 305, pp.20-25 生協総合研究所.
- リービー, スティーブン 2002 「ブログ空間の愉快的な生活」 Newsweek 日本版 2002年10月9日号.
- Blood, Rebecca. 2000 "weblogs: a history and perspective" [online] www.rebeccablood.net/essays/weblog_history.html.
- Boutin, Paul. 2002 "Michael Moore Caught At Own Game?" Wired News Nov. 21, 2002 [online].
- Dvorak, John C. 2002 "The blog phenomenon" PC Magazine February 5, 2002 [online].
- Glasner, Joanna. 2003 "Search Results Clogged by Blogs", Wired News May. 16, 2003 [online].
- Kawaura, Yasuyuki, Y. Kawakami and K. Ymashita. 1998 "Keeping a diary in cyberspace", in Japanese Psychological research. 40(4), pp.234-245.
- Sullivan, Andrew. 2002 "The Blogging Revolution Weblogs Are To Words What Napster Was To Music.", Wired Magazine May 2002 [online].
- 「日記」の項, 佐竹秀雄・三省堂編修所(編) 『デイリーコンサイス国語辞典』 (1991) 三省堂.

図1

